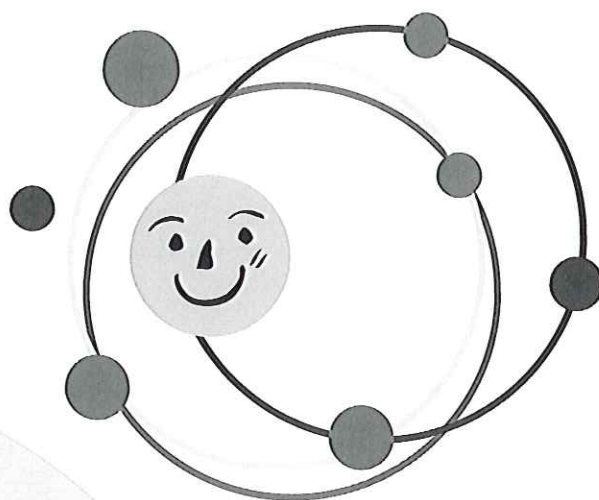


厚生労働省

シンポジウム



# ICF

International Classification of  
Functioning, Disability and Health

## 生活機能分類の活用に向けて

～共通言語としてのICFの教育・普及を目指して～

平成22年1月24日(日)  
明治大学リバティータワー1階  
リバティールーム

主催●厚生労働省 協賛●財団法人 厚生統計協会

協力●日本保健医療福祉連携教育学会 ソーシャルケアサービス従事者研究協議会 一般社団法人 日本介護支援専門員協会  
社団法人 日本社会福祉士会 社団法人 日本医療社会事業協会 社団法人 日本精神保健福祉士協会 日本ソーシャルワーカー協会

# 目次

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| ● 世界保健機関（WHO）からのメッセージ .....            | 3  |
| ● 開催主旨・開催概要 .....                      | 4  |
| ● プログラム .....                          | 5  |
| ● 講演者・パネリストプロフィール .....                | 6  |
| ● 講演概要                                 |    |
| 新予防給付におけるアセスメント・ケアプラン作成の考え方 .....      | 8  |
| 講師：木村 隆次 一般社団法人日本介護支援専門員協会会長           |    |
| 退院支援における ICF 評価の試み .....               | 10 |
| 講師：藤田 伸輔 千葉大学医学部附属病院地域医療連携部准教授         |    |
| 精神障害領域における ICF の活用に向けて .....           | 11 |
| 講師：安西 信雄 国立精神・神経センター病院副院長              |    |
| ICF の活用「生きることの全体像」についての「共通言語」として ..... | 12 |
| 講師：大川 弥生 国立長寿医療センター研究所生活機能賦活研究部長       |    |
| 保健医療福祉連携教育から見た ICF の利用状況 .....         | 14 |
| 指定討論者：真柄 彰 新潟医療福祉大学医療技術学部教授            |    |
| ソーシャルワーカーの視点と ICF .....                | 16 |
| 指定討論者：島野 光正 郡山市医療介護病院保健福祉等事業推進室長       |    |
| ● ICF とは .....                         | 18 |



## 世界保健機関（WHO）からのメッセージ

ICF シンポジウム

「生活機能分類の活用に向けて～共通言語としての ICF の教育・普及を目指して～」

2010 年 1 月 24 日、東京

世界保健機関（WHO）を代表して、私の同僚であるネナード・コンスタンチェックとともに皆様にご挨拶を申し上げます。ICF の普及・教育に関するこの重要なシンポジウムを開催される厚生労働省および厚生統計協会、同シンポジウムへのご協力を賜る日本保健医療福祉連携教育学会、ソーシャルケアサービス従事者研究協議会および日本介護支援専門員協会等の各位にお祝いの言葉を申し上げます。

日本での ICF に対する関心の高まりは、WHO でも把握しております。日本では、ICF、ICF-CY の日本語版が用意されています。日本の保健、社会、教育といった各分野でも、ICF 開発のためのさまざまな活動が行われております。日本の方々が ICF の国際的な活動に協力され貢献されていることは、WHO にとっても、大変心強いことです。

WHO の考える ICF の普及について述べさせていただきます。ICF とは、人口と個人の健康、障害に関する情報の記録およびコーディングのための標準といえます。そのため、ICF には、障害の定義と最新の概念モデルが用意されています。

今回のシンポジウムは、それが実務的であることに大きな特徴があります。実践に向けて、ICF を具体的にどのように普及すれば良いかを知っておくことは大切なことです。また、このシンポジウムを通して、日本で ICF を普及させるために今後何をすれば良いのかということについて ICF 関係者の間で共通の認識が得られることになるでしょう。さらに、私たちは、このシンポジウムが、「防ぐことのできる障害」（障害の予防とその重要性）に関する WHO のプロジェクト、ICF 教育ツール、WHO 障害評価表「WHO-DAS 2.0」などの ICF 評価ツール等に関する国際的な活動にも貢献することを期待しております。シンポジウム参加者の方々が WHO のこれらの成果を取り入れながら、国際的な活動をさらに発展させることを期待しております。

日本は ICF の普及を先頭に立って推進させる大きな力を秘めた国です。日本が高齢化社会であることは誰もが知っていることです。「生命の量」と「生命の質」は同じように大切です。医療では、退院された方々がその後の日常生活をどのように送っているかを継続的に追跡する必要があります。人々を日常生活と生活環境との関連の中で捉える必要があるのです。

したがって、ICF の普及に日本がより深く関与する必要があると言えるでしょう。WHO は、このシンポジウム後も厚生労働省並びに ICF 関係者の皆様と協力して、ICF の普及の可能性について探ってゆく所存であることを、同僚のネナード・コンスタンチェックとともに表明いたします。

シンポジウムにご出席頂いた皆様に謝意を表するとともに、シンポジウムの成功を心よりお祈り申し上げます。



世界保健機関（WHO）

分類・ターミノロジー・標準 コーディネーター

ベデルハン・ウースタン

Dr. Bedirhan Üstün